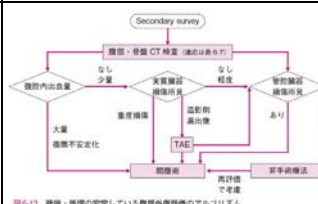
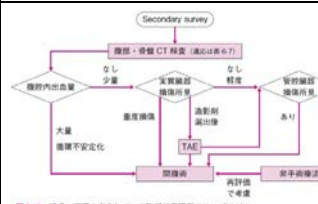
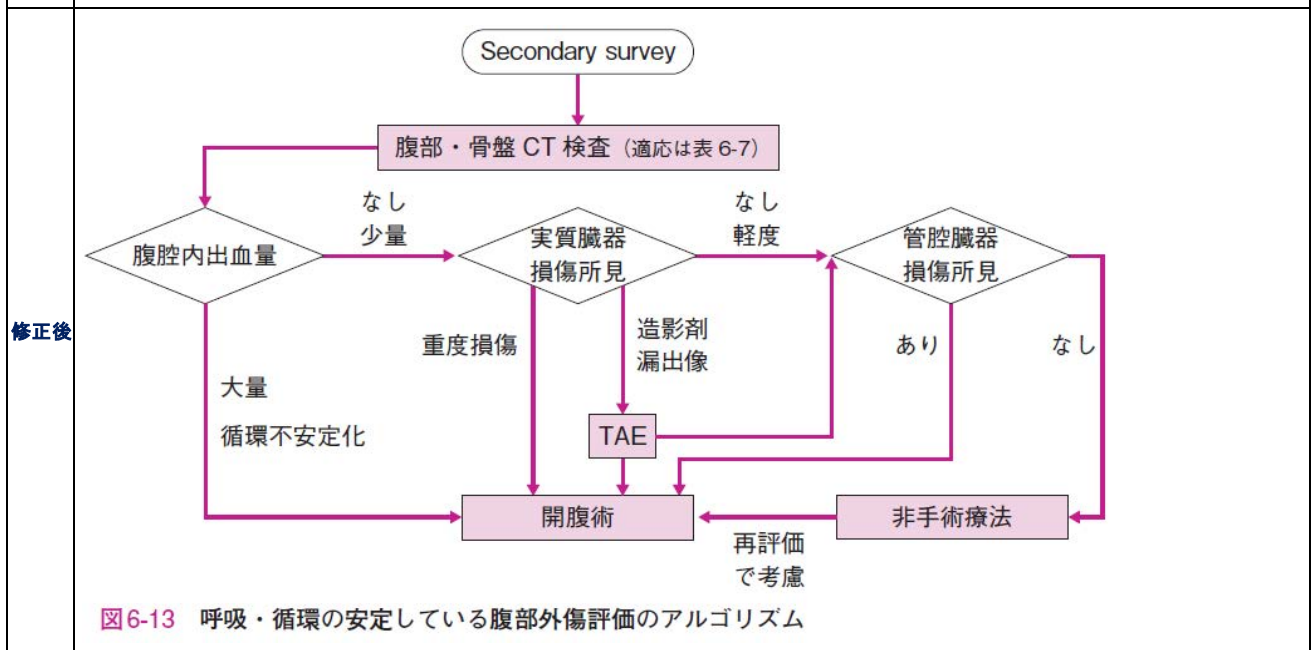
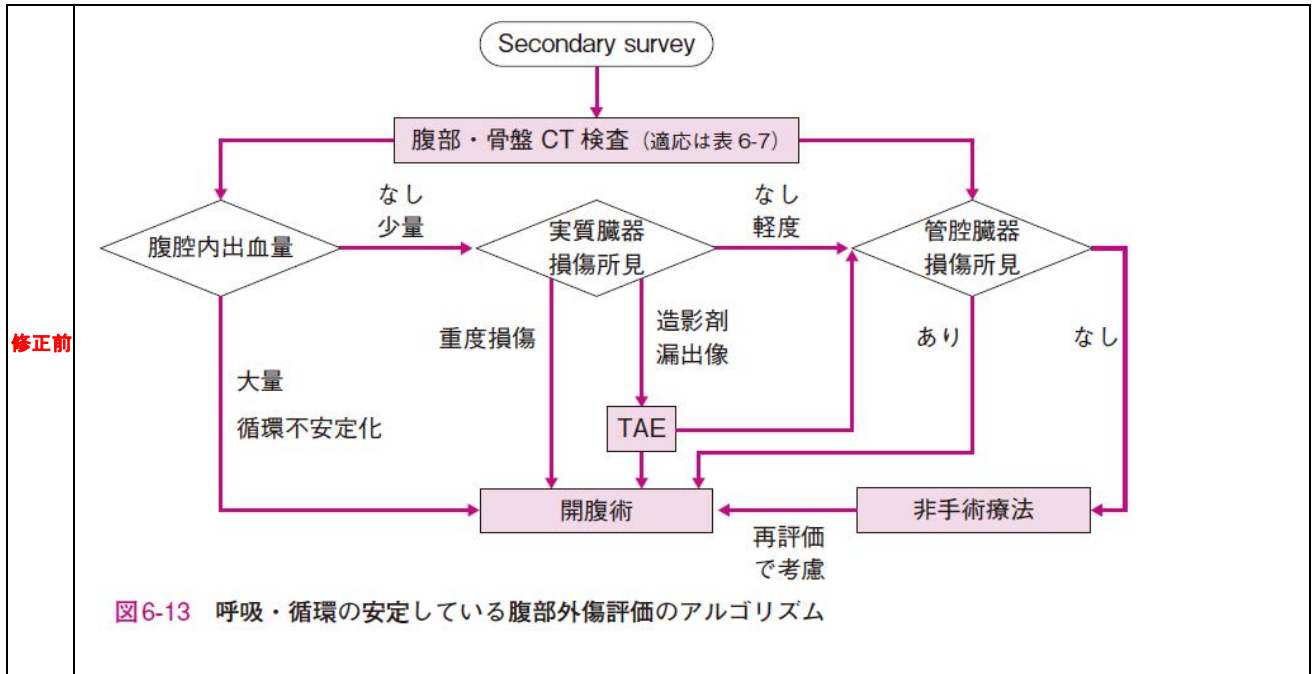


●5刷りにて訂正

ページ	章	修正箇所	修正前	修正後
p.25	診療1-1「初期診療; Primary surveyと蘇生」	B:呼吸と致命的な胸部外傷の処置 観察のポイント	触診:気管変位	触診:気管 偏位
p.108	第6章「腹部外傷」	図6-13		
p.138	第8章「頭部外傷」	表8-5	4. 頭蓋骨(陥没または頭蓋底)骨折の臨床徴候を含む肋骨より上の外傷	4. 頭蓋骨(陥没または頭蓋底)骨折の臨床徴候を含む 鎖骨 より上の外傷
p.138	第8章「頭部外傷」	図8-17	意識が生命になるまで絶飲食	意識が 清明 になるまで絶飲食



●4刷りにて訂正

ページ	章	修正箇所	修正前	修正後																																																
p.133	第8章「頭部外傷」	表8-2	<p>表8-2 TCDB分類によるびまん性脳損傷の割合と転帰</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>良好群GR/MD (%)</th> <th>不良群SD/VS (%)</th> <th>死亡群D (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>diffuse injury type I</td> <td>45.2</td> <td>21.0</td> <td>33.9</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type II</td> <td>40.0</td> <td>22.9</td> <td>37.1</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type III</td> <td>9.0</td> <td>6.9</td> <td>84.0</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type IV</td> <td>15.0</td> <td>10.0</td> <td>75.0</td> </tr> <tr> <td>total</td> <td>24.0</td> <td>13.9</td> <td>62.1</td> </tr> </tbody> </table> <p>diffuse injury type I : CT上明らかな頭蓋内病変を認めない [文献22]より引用] diffuse injury type II : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽はみえる diffuse injury type III : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽の圧迫または消失所見あり diffuse injury type IV : 5mmを超える正中偏位あり</p>		良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)	diffuse injury type I	45.2	21.0	33.9	diffuse injury type II	40.0	22.9	37.1	diffuse injury type III	9.0	6.9	84.0	diffuse injury type IV	15.0	10.0	75.0	total	24.0	13.9	62.1	<p>表8-2 TCDB分類によるびまん性脳損傷の割合と転帰</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>良好群GR/MD (%)</th> <th>不良群SD/VS (%)</th> <th>死亡群D (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>diffuse injury type I</td> <td>61.6</td> <td>28.8</td> <td>9.6</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type II</td> <td>34.5</td> <td>52.0</td> <td>13.5</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type III</td> <td>16.4</td> <td>49.7</td> <td>34.0</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type IV</td> <td>6.2</td> <td>37.6</td> <td>56.2</td> </tr> <tr> <td>total</td> <td>28.9</td> <td>47.1</td> <td>23.9</td> </tr> </tbody> </table> <p>diffuse injury type I : CT上明らかな頭蓋内病変を認めない [文献22]より引用] diffuse injury type II : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽はみえる diffuse injury type III : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽の圧迫または消失所見あり diffuse injury type IV : 5mmを超える正中偏位あり</p>		良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)	diffuse injury type I	61.6	28.8	9.6	diffuse injury type II	34.5	52.0	13.5	diffuse injury type III	16.4	49.7	34.0	diffuse injury type IV	6.2	37.6	56.2	total	28.9	47.1	23.9
	良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)																																																	
diffuse injury type I	45.2	21.0	33.9																																																	
diffuse injury type II	40.0	22.9	37.1																																																	
diffuse injury type III	9.0	6.9	84.0																																																	
diffuse injury type IV	15.0	10.0	75.0																																																	
total	24.0	13.9	62.1																																																	
	良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)																																																	
diffuse injury type I	61.6	28.8	9.6																																																	
diffuse injury type II	34.5	52.0	13.5																																																	
diffuse injury type III	16.4	49.7	34.0																																																	
diffuse injury type IV	6.2	37.6	56.2																																																	
total	28.9	47.1	23.9																																																	

※表の数字修正(下表参照)

修正前	表8-2 TCDB分類によるびまん性脳損傷の割合と転帰																								
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>良好群GR/MD (%)</th> <th>不良群SD/VS (%)</th> <th>死亡群D (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>diffuse injury type I</td> <td>45.2</td> <td>21.0</td> <td>33.9</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type II</td> <td>40.0</td> <td>22.9</td> <td>37.1</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type III</td> <td>9.0</td> <td>6.9</td> <td>84.0</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type IV</td> <td>15.0</td> <td>10.0</td> <td>75.0</td> </tr> <tr> <td>total</td> <td>24.0</td> <td>13.9</td> <td>62.1</td> </tr> </tbody> </table> <p>diffuse injury type I : CT上明らかな頭蓋内病変を認めない [文献22]より引用] diffuse injury type II : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽はみえる diffuse injury type III : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽の圧迫または消失所見あり diffuse injury type IV : 5mmを超える正中偏位あり</p>		良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)	diffuse injury type I	45.2	21.0	33.9	diffuse injury type II	40.0	22.9	37.1	diffuse injury type III	9.0	6.9	84.0	diffuse injury type IV	15.0	10.0	75.0	total	24.0	13.9	62.1
	良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)																						
diffuse injury type I	45.2	21.0	33.9																						
diffuse injury type II	40.0	22.9	37.1																						
diffuse injury type III	9.0	6.9	84.0																						
diffuse injury type IV	15.0	10.0	75.0																						
total	24.0	13.9	62.1																						

修正後	表8-2 TCDB分類によるびまん性脳損傷の割合と転帰																								
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>良好群GR/MD (%)</th> <th>不良群SD/VS (%)</th> <th>死亡群D (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>diffuse injury type I</td> <td>61.6</td> <td>28.8</td> <td>9.6</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type II</td> <td>34.5</td> <td>52.0</td> <td>13.5</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type III</td> <td>16.4</td> <td>49.7</td> <td>34.0</td> </tr> <tr> <td>diffuse injury type IV</td> <td>6.2</td> <td>37.6</td> <td>56.2</td> </tr> <tr> <td>total</td> <td>28.9</td> <td>47.1</td> <td>23.9</td> </tr> </tbody> </table> <p>diffuse injury type I : CT上明らかな頭蓋内病変を認めない [文献22]より引用] diffuse injury type II : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽はみえる diffuse injury type III : 5mm以下の正中偏位あり、脳底槽の圧迫または消失所見あり diffuse injury type IV : 5mmを超える正中偏位あり</p>		良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)	diffuse injury type I	61.6	28.8	9.6	diffuse injury type II	34.5	52.0	13.5	diffuse injury type III	16.4	49.7	34.0	diffuse injury type IV	6.2	37.6	56.2	total	28.9	47.1	23.9
	良好群GR/MD (%)	不良群SD/VS (%)	死亡群D (%)																						
diffuse injury type I	61.6	28.8	9.6																						
diffuse injury type II	34.5	52.0	13.5																						
diffuse injury type III	16.4	49.7	34.0																						
diffuse injury type IV	6.2	37.6	56.2																						
total	28.9	47.1	23.9																						

●3刷りにて訂正

ページ	章	修正箇所	修正前	修正後
p.10	第1章「初期診療総論」	図1-9	もつとも優先度の高い「D」の観察: 「切迫するD」 GCS合計点8以下の意識レベル 脳ヘルニア徴候を伴う意識レベルの低下 (GCS合計点2以上低下) (瞳孔不同、片麻痺、Cushing現象)	もつとも優先度の高い「D」の観察: 「切迫するD」 ・GCS合計点8以下の意識レベル ・ 経過中にGCS合計点が2以上低下 ・ 脳ヘルニア徴候を伴う意識障害 (瞳孔不同、片麻痺、Cushing現象)
p.11			左段、6行目	瞳孔不同、片麻痺やCushing現象から脳ヘルニアを疑う意識障害の場合は、生命を脅かす重症頭部外傷と位置づけ、JATEC では「切迫するD」と表現する。
p.25	診療1-1「初期診療: Primary surveyと蘇生」	D: 中枢神経障害の評価観察のポイント	切迫するD ・GCS合計点8以下 ・GCSが急速に2点以上低下 ・瞳孔不同/片麻痺/Cushing現象	切迫するD ・GCS合計点8以下 ・GCSが急速に2点以上低下 ・ 脳ヘルニア徴候を伴う意識障害
p.26	診療1-2「初期診療: Secondary survey」		<p>PSと瞳孔によりA・B・Cが安定するまでSSには移らない。意識・バイタルが変化したら再度A・B・Cを確認</p> <p>切迫するDに対する継続CTの優先</p> <p>観察のポイント ・A・B・Cが安定していることが確認済み ・転倒が原因は1回も起こり続けても考慮</p> <p>観察のヒント: AMPLE アムロギー、服薬、既往歴、圧痛、最終吐瀉、交通機転</p> <p>全身観察: 顔から頭先まで/顔面/すべての孔 [話を聞いて、見て、触って、触って]</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p>	<p>PSと瞳孔によりA・B・Cが安定するまでSSには移らない。意識・バイタルが変化したら再度A・B・Cを確認</p> <p>切迫するDに対する継続CTの優先</p> <p>観察のポイント ・A・B・Cが安定していることが確認済み ・転倒が原因は1回も起こり続けても考慮</p> <p>観察のヒント: AMPLE アムロギー、服薬、既往歴、圧痛、最終吐瀉、交通機転</p> <p>全身観察: 顔から頭先まで/顔面/すべての孔 [話を聞いて、見て、触って、触って]</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p> <p>瞳孔・瞳孔 瞳孔観察のポイント ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応 ・瞳孔の大きさ、瞳孔の位置、瞳孔の反応 ・瞳孔の形状、瞳孔の反応 ・瞳孔の対称性、瞳孔の反応</p>
			※図の項目名修正(次ページ図参照)	
胸部: 観察のポイント			「EFAST」を追加。	

p.51	第3章「外傷と循環」	右段、下から5・6行目	また、緊張性気胸の鑑別にはEFASTが有用である(第5章「胸部外傷」p82参照)。	削除
p.61	技能3-1「ショックとFAST」	「4. EFAST」	<p>適応:</p> <ul style="list-style-type: none"> PSで緊張性気胸を疑った場合 SSの胸部診察時に気胸の可能性がある場合 <p>方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> リニアプローブ(なければコンベックスプローブでも可) 鎖骨中線、第2肋間もしくは第3肋間 縦切り Bモードでsliding signの有無を確認する。 Mモードでseashore signがbarcode signが確認する。 <p>気胸がある場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> Sliding signの消失 Seashore signではなくbarcode signを認める。 	<p>EFASTは身体所見やX線写真では認知できないような軽微な気胸の検出に有用。ただし、皮下気腫があると観察できないことがある。</p> <p>適応:</p> <ol style="list-style-type: none"> 気胸の可能性のある場合にSSで行う。 気管挿管下に隣圧換気を行う場合にはPSでも行う(陰性ならSSで再検査する)。 <p>方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> プローブはリニアプローブの方が見やすいが、コンベックスプローブでも可。 鎖骨中線、第2肋間もしくは第3肋間。 縦切り(肋骨と肋骨の間で見える)。 Bモードでlung slidingの有無を確認する。 Mモードでseashore signの有無を確認する。 <p>気胸がある場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> Bモードでlung slidingが消失する。 Mモードでseashore signが消失し、代わりにbarcode signを認める。
p.81	第5章「胸部外傷」	右段、(2)超音波検査、5・6行目	正常では壁側胸膜の下方で臓側胸膜が呼吸運動に合わせてスライドする様子(lung sliding またはpleural sliding)や、肺表面でのcomet tail artifactが観察される(図5-8)。	正常では壁側胸膜の下方で臓側胸膜が呼吸運動に合わせてスライドする様子(lung sliding またはpleural sliding)や、肺表面でのcomet tail artifactが観察される(図5-8)。
p.82		右段、下から6・7行目	さらにMモード表示にするとバーコードのような直線のみが見えるstratosphere signが認められる。	さらにMモード表示にするとバーコードのような直線(barcode sign)が認められる。
p.135	第8章「頭部外傷」	表8-3タイトル 表8-3	終症であっても頭部CT検査が必要な危険因子 重症化の予測因子: 器質的頭蓋内損傷を疑う所見: CT検査の基準	終症であっても 重症化を予測させる危険因子 削除
p.164	第11章「脊椎・骨髄外傷」	右段、5行目～	なお終症であっても表8-3に記載した危険因子が存在すれば、早めに頭部CT検査を行う。	とくに終症であっても表8-3に記載した危険因子が存在すれば、 より慎重に対応する。
p.291	第11章「脊椎・骨髄外傷」	右段、下から4行目	損傷臓(C5~C7)	損傷臓(C3~C5)
p.291		表A4-1	外因の合計	部位別損傷 外因種別の合計
p.293	表A4-4	表A4-4 外傷と主な急性病の罹患患者数		表A4-4 外傷と主な急性病の罹患患者数
p.293		表A4-4 外傷と主な急性病の罹患患者数		表A4-4 外傷と主な急性病の罹患患者数
p.295	Appendix4「外傷疫学」	表A4-5	※図の数字を修正(次ページ図参照)	
p.295	Appendix4「外傷疫学」	表A4-5	※図の数字を修正(次ページ図参照)	
p.295			※図の数字を修正(次ページ図参照)	
p.322	Appendix10「重要な用語・略語」	略語と暗記法	具体的には、GCS合計点が8以下、意識レベルの急激な低下(GCS合計点で2以上の低下)、瞳孔不同やCushing現象などから脳ヘルニア徴候が出現したときとする。	具体的には、①GCS合計点が8以下、②意識レベルの急激な低下(GCS合計点で2以上の低下)、③瞳孔不同やCushing現象などから 脳ヘルニア徴候が疑われる重症経過 のときとする。

●2刷りにて訂正

ページ	章	修正箇所	修正前	修正後
p.2	第1章「初期診療総論」	図1-1タイトル	生命維持の仕組み	生命維持の仕組みと 障害
p.63	技能3-2「IOI(骨髄内輸液)」	図3-2-1		
p.113	第7章「骨盤外傷」	右段、「II 解剖」, 9行目ほか	肋骨(横)突起	横(肋骨)突起
p.188	第13章「熱傷・電撃傷」	左段、「1. A: 気道の評価」, 3行目	とくに、生理学的に気道の狭い小児においては、気道閉塞をきたしやすい。	とくに、 小児では気道が狭いため 、気道閉塞をきたしやすい。
p.265	第20章「複数患者への対応」	図20-2	左右入れ替え	

修正前

図3-2-1 骨髄路確保の手技

修正後

図3-2-1 骨髄路確保の手技